

ふれあい 88 号 東京言友会一會員の「個的」伝言板

「吃音者宣言」の今一「吃音者宣言」批判

マージナルマンとしての吃音者

「吃音者はこうもりのような存在だ」という話が雑談の中で出たことがありました。多くの吃音者の心理状態を如実に現しているのではないのでしょうか。また「障害者」の中でも「たかが吃音ぐらいで・・・」という表現も見られます。

もっとも、「軽い人の方がかえってしんどいのでは」という吃音者の意見や、『『重度（の「障害者」）』『軽度（の「障害者」）』という言いかたをするけれど、差別に軽重はない』という「障害者」の意見もあります。

このへんのところをを考えていて、以前呼んだ本に書いてあったマージナルマンという概念を思い出しました。

本はH・デッキー・クラーク「差別社会の前衛—マージナリティ理論の研究」で、南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）下のカラードのマージナル・シュチュエーション（状況）と心理的マージナリティの関係性を問題にした本です。カラードとは白人でもアフリカ人でもアジア人でもない人ということで、（敢えて訳出すれば「混血」ということになるのですが、）マージナル（境界的）な位置にあります。もっとも一つの被差別事項に対して中間的位置があるということではありません。差別に対する通過（可能）性の問題いで、要するにスティグマに対する（主に差別する側の）非一貫性が心理的マージナリティを生み出すのではないのでしょうか、ここでいう心理的マージナリティとは、自己のアイデンティティ（自己同一性）を見いだしえないところでの葛藤ということで要約できるのではと思います。（アイデンティティの「喪失」を巡る葛藤は近代的個我の論理の上に立っていて、その論理の成立以降の問題ではないかという指摘をしておきたいと思います。「精神障害者」への差別の問題がそこにはらまれていますので、その問題が歴史的相対性の中にあるということを明示しておきます。）

この問題は、日本社会で「かなり」の面で通過可能な「在日（朝鮮人、中国人）」二世・三世がなぜ、本名を名乗り「母国語」を学ぶのか、ということに端的に現れています。

さて話を元に戻します。私はカラードと吃音者の存在が、重ね合うような気がします。

この境界性ということで吃音者の中には自分は「障害者」でない、とする人がいますし、「健全者」の文化一価値観（「健全者」幻想）を自分の文化一価値観としてもち行動しています。カラードが白人の（文化）方ばかりみて、アフリカ人の方をみようとしないように、なんとか「健全者」として通過したいとやっきになり、「障害者」の方に向かい合おうとしません。確かに「障害者」運動の歴史性の浅さということがありますが、・・・。

もうひとつ差別の問題をとらえにくくしているのは、差別を差別としてとらえきれないという問題があります。

差別という場合、何等かの形で排除されることを意味しますが、排除がはっきりする場合比較的容易に差別としてとらえられるのですが、問題は同情とか「励まし」が差別とし

ととらえられないということです。例えば、就職試験を受けて落とされたとき、排除されたという意識をもつのですが、地位のヒエラルヒーの中で相対的下位に置かれるというようなことを排除としてとらえられない。という問題です。前者を「絶対的排除」後者を「相対的排除」という風に名付けて置きます。この二つは絡みあっています。例えば、一つの会社の試験を落とされても他の「低いレベルの会社」がうかるとか、就職できなくても福祉制度がある、というぐあいに……。前者が比較的純粋な形でしめされるのは、「障害者」の抹殺の歴史です。もっともそれでさえ差別としてとらえられないということがあります。ヒットラーの「精神障害者」二十七万五千人の虐殺は「障害者」の親の要望ということから始まっていますし、「障害者」運動を「進める」「障害者」の中でさえ「・・・かって差別でなかった同じもの（障害者の殺害）を差別に転化させたからです」という意見さえあります。（これは当事者意識と第三者的意識の混同・混乱があるのですが、歴史の中で、「障害者」を殺害することを「合理化する」ということがあったら、それを「差別でなかった」と言えるのでしょうか？）

しかし、一般的に言うと、「絶対的排除」の方は差別としてとらえられやすいのですが、「相対的排除」の方は差別としてとらえられにくいようです。

この問題は逆に吃音者の問題をとらえていくとはっきりします。同情は、何等かの「優位性」から「劣位性」の者に向けられるとして、比較的、差別としてとらえられます。問題は「励まし」さえ差別であるという視点です。これは「落ち着いてゆっくりしゃべりなさい」という「励まし」が吃音者を蟻地獄へ落とすということをとらえれば明らかになります。要するにスティグマという意識（無自覚的意識をふくめ）があるところでの対応は差別としてあらわらざるを得ません。吃音者の問題でいえば、「どもりは悪いもの、劣ったもの」という意識の上での対応は差別として現れるということです。

さて問題は「絶対的排除」を重い差別、「相対的排除」を軽い差別としてとらえる傾向です。だがこれは肉体的苦痛と精神的苦痛はどちらが辛いかというような比較をするようなことではないかと思えます。それは先程のべた「在日」の話にも示しえています。又、アパルトヘイト下のアフリカ人は「絶対的排除」の性格の強い差別を受けるが由に、自己の見当識をアフリカ人であることに置く（価値観をアフリカ人の文化に置く）傾向が強く、「相対的排除」の性格のより強い差別の中でのカラードのような心理的マージナリティへ陥ることが少ない、ということが言えるのではないのでしょうか。

要するに、この二つの排除の性格一差別の形態の違いで、差別の重い軽いという問題ではないのではと思えます。

そしてもう一つ仮説的に提起できるのは、ひとつの被差別事項で、「絶対的排除」の性格が強い時は、「相対的排除」が弱く、「相対的排除」の性格が強い時は「絶対的排除」が弱いということで、ひとつの被差別事項では差別度は一定だという定式が描けるのではと思えます。

繰り返しになりますが、マージナルマンというその中間項的存在（の人）があるわけでは

ないと私は思います。一つの(被)差別事項では、差別する側、差別される側と区分され、中間項など存在するわけではありません。マージナルマンというのは一つの心理的機制の問題と言えるのではないのでしょうか。(もっとも、認識論的に掘り下げると問題は錯分子的構成になりますが、ここでは割愛します。)

さて吃音者が自らを「障害者」としてとらえようとしなさい、ということは「吃音者宣言」にも現れています。もし「障害者」宣言としても押し出そうという意識性があれば、あの「明るく前向きに生きている人もいる」という文は出てこなかった、「吃音者宣言」は「障害者宣言」になっていない、と言えらるのではと考えています。

マージナルマンということで想起するのは、アパルトヘイト下で「名誉白人」という不名誉な称号で白人世界にパスしている日本人の存在です。(通行者のなところではマージナルマンという規定は妥当しませんが、)私は、「名誉白人」と吃音者の意識性がだぶってしまうのです。これらのことの中で私が問題にしているのは、なぜ吃音者は「健全者」の方ばかりをみて、「障害者」と向かい合おうとしないのか、手をつなごうとしないのか、ということです。確かに何とかパスしたい、「絶対的排除」を受けたくないということは、理解できなくはないですが、そのことなかで排除の構造(とりわけ「相対的排除」の構造)、差別の構造をとらえきれず、その中で呻吟せざる(心理的マージナリティにおちいらざる)を得ません。

講習会の中でAさんが、「これからは障害者が奉仕する時代だ、と言っている障害者の発言がある」という話をされていましたが、私は競争原理の中で、いじめや様々の「健全者幻想」というところで通じる矛盾が破滅的に露呈している時、「障害者」こそがそれを止揚(解決)しうる新しい文化一関係性、あったかい関係性を作り得るのだと思います。そういうこととして、私は吃音者をはっきりと「障害者」として規定して、差別と対決し、「障害者」と手をつなぎ、「障害者」の新しい文化を、「健全者」との共生という中で、「あったかい」社会を作り出していく吃音者運動を進めたい、その運動を踏み出したいと思っています。

(追補1) スティグマについて

スティグマという言葉はそもそもローマ時代に奴隷に押しつけた烙印を指しているという指摘を朝日新聞の論文的な文で読んだことがあります。私が最初にスティグマに関する文を見たのはアーヴィング・ゴッフマン「スティグマの社会学」で、そこではギリシャにさかのぼっています。その本を読んで貰えると説明の必要もないのですが、その本につけられた副題がその言葉の概念をとらえるのに役に立ちます。「烙印を押されたアイデンティティ」というのがそれで、これは差別の問題を考える時、差別の「本質」を簡単明瞭に言い当てているということで、私はかなりこの言葉を使っています。(尤も認識論的に厳密に考えると、この規定は先にアイデンティティが図として浮かび揚がってそれに烙印を押すというイメージに陥りますので、その同時性を指摘する私としては他のもっと適当な規定をなさねばならないのですが、うまく思い浮かびません、とりあえずの規定として含み措き

下さい。)

私はこの言葉にもっと簡単に「負性」という訳を当てたりします。簡単明瞭なのですが、差別という問題が浮かび揚がって来ません。他者で「聖痕」という訳を当てる人もいます。これはキリスト教の時代にスティグマが「正」「負」の二義的意味を持ったというところでの「正」的な突き出しで居直り的な姿勢をも示しています。日本語で言えば「ケガレ」が両義的意味を持っていたことに通じています。ただ私としては、キリスト教の概念は日本では理解されがたいということ、宗教的概念になってしまう、ということもあって余り援用できません。

しかし「烙印を押されたアイデンティティ」という表現をすると、今度はアイデンティティという言葉の説明をしなければなりません。この言葉はかなり使用されるようになってきているのですが、一般には「自己同一性」という訳が当てられますが、この言葉に頻繁に出会っていないと何のこともか解りはしません。私はゴーギャンが言ったとかいう「私は誰か？私はどこへ行くのか」という名言が、この言葉のイメージを湧き足させると援用します。ただし、本文中にも書きましたように、この言葉には、「精神障害者」への差別の問題が孕まれていますので、余り使いたくない、という思いもあります。「被差別事項」という造語も考えましたか、この語を使用すると循環論法的になってしまいます。そこでなんとかスティグマという言葉をもそのまま定着させようとしている次第です。

(追補2) 被差別の共同性について

私は、言友会に来て最初の3分間スピーチで、言友会の中で暖かさを感じたと言いました。そして村上氏の「傷をなめあうような関係だ」という批判に「傷もなめあえないようなら会の存在意義はない、それが会の基底にあるべきだ」、としてそれを「被差別の共同性」という言葉で表現しました。

今、そのような「被差別の共同性」が言友会にあるのかと思っています。確かに私が来たころに感じた「暖かさ」は幻想ではなかったし、個々にはその「暖かさ」をもっている人はいるのだけれど、言友会総体としてその「暖かさ」があるのか？と問い掛けられたら、答えに窮してしまいます。

私はこれはひょっとしたら「吃音者宣言」の「明るく前向きに生きる」という精神が言友会に浸透してきた由ではないかと、思うのです。差別に対峙するという姿勢ぬきに「明るく前向きに生きる」としたら、「明るく前向きに逞しく人を踏みつけて生きる」となってしまうのではないか。そんなことなら後ろ向きに生きている方がよっぽど「暖かさ」があるのではないか、互いに励ましあって発声練習をしていた時の方が「暖かさ」があったのではないか、などとも思うのです。私の感違いに過ぎないのでしょうか。